

## <巻 頭 言>



### 年頭のご挨拶

杉 山 弘 泰\*

令和5年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。  
皆様方におかれましては健やかに新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

昨年初は世界中を恐怖のどん底に叩き込んだコロナ禍もワクチン接種の拡大によって、漸く終息へ向かって行くであろうという気分があったように記憶します。

しかしながらコロナ禍の終息を待つこと無くロシアによるウクライナ侵攻が起こり、世界は第三次世界大戦、核戦争の恐怖におののく事になりました。21世紀にもなって私たちの日常生活と同じような便利さを備えた市街地がミサイルや戦車等の砲撃で廃墟となって行く事が信じられません。ウクライナの大統領が俳優時代に主演したドラマを動画配信で見ましたが、首都の美しい街並みが映されており、わずか一年での様相の隔絶に愕然とします。

ウクライナの中央には南北に流れるドニプロ（ドニエプル）河があります。ロシアからベラルーシ、ウクライナを経て黒海へ注ぐ総延長2,300 km、流域面積52万km<sup>2</sup>の大陸河川です。河幅が広がっているのはダム貯水池で、ウクライナで最上流のキーウ発電所（40万kW）からカホフカ発電所（35万kW）まで6ヶ所のダム発電所、合計370万kWの出力があります。いずれのダムもゲート部分のコンクリート重力式とフィル式の複合構造です。

現在最大の発電出力を持つのはドニプロ発電所（155万kW）です。1932年の完成時にはソ連最大の水力発電所だったそうですが、1941年にドイツ侵攻を食い止めるためソ連自らこのダムを爆破したとの事。当時下流域では数万人規模の洪水被害が出たと言われています。現在ロシアは電力設備を攻撃して冬期の電力供給を停止させようとしていると報道されています。われわれと同じエンジニアが計画し、設計・建設し、維持しているダムや発電設備が戦争で破壊されることに大変に深い悲しみを覚えます。戦争が終結し、再び文化の香りの高いウクライナが復興されることを願ってやみません。

この戦争の世界経済への影響も見過ごすことはできません。温暖化問題から化石資源の新規開発が減少している状況にあって、欧州へのロシア産原油・天然ガスの供給が無くなり、エネルギー価格が急騰、欧米ではポストコロナを見据えた物価上昇傾向もあって急速なインフレに見舞われています。インフレ抑制のための内外金利差は急激なドル高/円安を引き起こし、日本でも輸入エネルギー資源を筆頭に各種物価が上昇しつつあります。

\* 一般社団法人 日本大ダム会議 会長

グローバル化しフラット化すると言われていた世界はサプライチェーンが不安定化し、各国は自国第一主義の内向きになってきているようです。このような時代であるからこそ、パソコン上の画面やイメージではなく現実の存在としての相手を知り、知識や意見を交換する事は大変に重要な事だと思えます。

さて昨年5月、一昨年開催予定でコロナ禍のために延期されていた国際大ダム会議（ICOLD）第27回大会が、第90回年次例会と合わせて仏国マルセイユで実開催され、総裁、副総裁選挙が行われました。総裁選挙では米国のロジャース氏が退任し、新総裁として仏国のリノ氏が選出されました。また副総裁は地域代表5名と代表地域を特定しない1名で構成されますが、米州、欧州、アフリカ選出の副総裁が交代となりました。本年の年次例会はスウェーデンで開催の予定ですが、現在のアジア枠選出の副総裁が退任の予定で、このポストの副総裁選挙が行われる予定になっています。

9月末には、コロナ禍で2年延期されていた東アジア地域ダム会議（EADC）が韓国大ダム会議の主催で開催されました。日本からも8名が参加し、学術発表のほか次回開催のEADC名古屋（24年度）の参加招請プレゼンテーションを行いました。中国からは厳しいゼロコロナ政策の故か2名の参加のみであり、国際会議と呼ぶにはやや寂しいものでしたが、多くの学術発表のほかテクニカルツアーやミニコンサートなど主催国の意気込みが感じられるものでした。本年は各位の協力を得つつEADC名古屋の開催準備を進めてゆきたいと思えます。

国内に目を転じると10月に、日本ダム協会主催第81回ダム施工技術講習会と合同で第55回ダム技術講演討論会（日本大ダム会議、ダム・堰施設技術協会共催）を開催することが出来ました。既に3回目となるウェブ併用方式で、会場およびウェブで約190名の参加をいただきました。今回は初の試みとしてICOLDリノ新総裁に「特別公演」をお願いし、快諾を頂いたビデオメッセージを基調講演として映写しました。新総裁として今後の国際大ダム会議の取り組み方針と「ダムの安全宣言」における具体的な課題について図表を交えながら約30ページのパワーポイントを使い丁寧に説明をいただきました。今後も各国大ダム会議やICOLDとの連携を深めるこうした取り組みを進めてゆきたいと考えています。

2023年は1953年に日本大ダム会議が戦後再興されてから70年、戦前の世界大堰堤会議日本国内委員会設立から数えると93年となります。当会議は国内の土木系学協会の中でも特に国際色が強く、ICOLDとの密接な連携を取っています。これは戦前の国際的な技術者の会議の国内での受け皿としてスタートした性格がきちんと引き継がれ、その上で戦後これまでの長きにわたる諸先輩、現役諸氏の信念、努力のたまものであると思えます。

世界の国々が内向きになろうとしているかのこの時代に、顔を突き合わせて各国で同じ課題に取り組む人たちと議論をすることが出来る国際大ダム会議、日本大ダム会議の役割はこれまで以上に重要で意味のあるものになって行くのではないかと思われます。

これからも永きにわたり本会議へのご支援、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

本年もよろしくお願いいたします。